

# 大茶博

茶の道徳と精神の統一を以て其の道徳を  
示すに神の道徳を以て其の道徳を以て其の道徳を

茶の道徳と精神の統一を以て其の道徳を  
示すに神の道徳を以て其の道徳を以て其の道徳を

茶の道徳と精神の統一を以て其の道徳を  
示すに神の道徳を以て其の道徳を以て其の道徳を

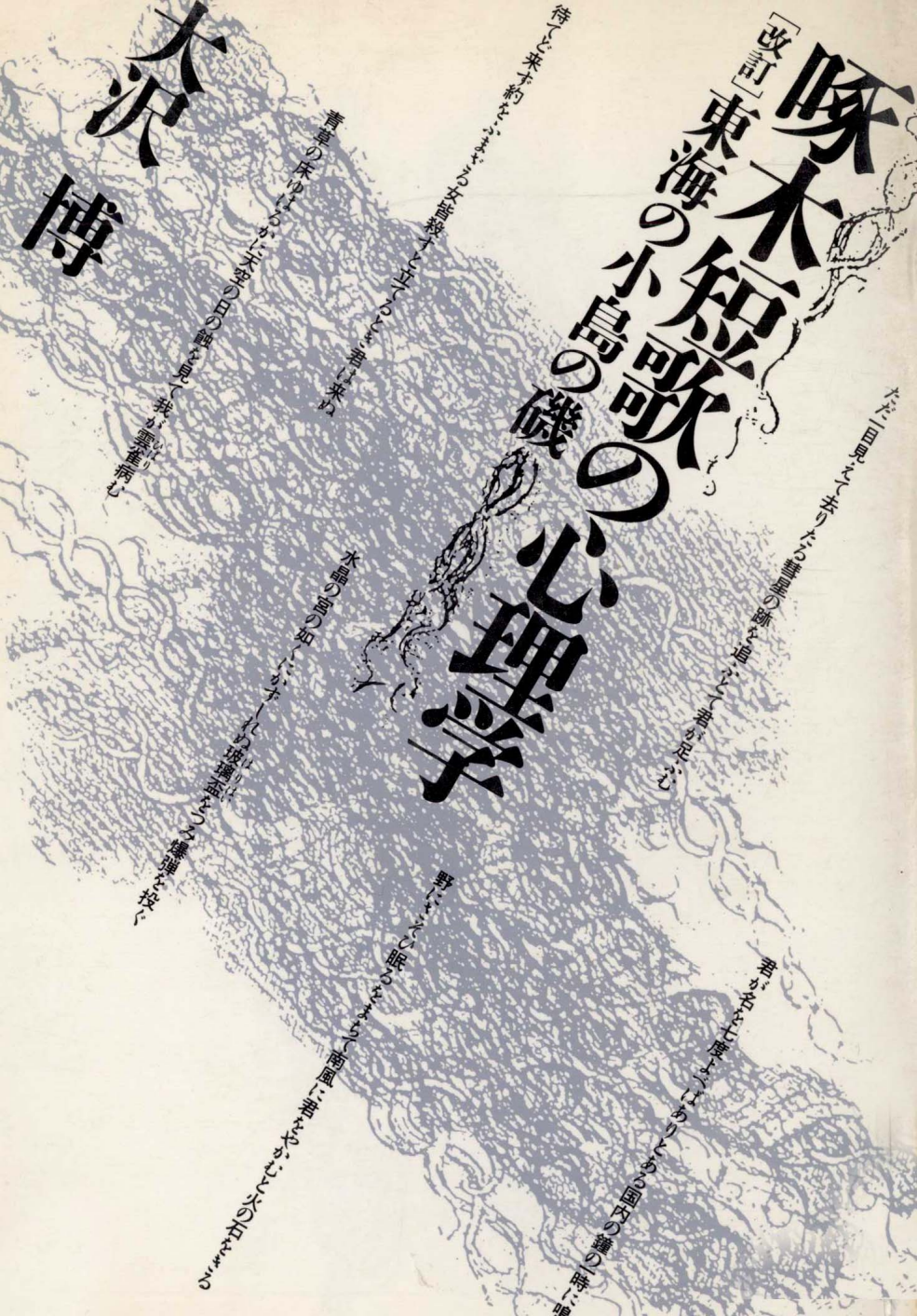
茶の道徳と精神の統一を以て其の道徳を  
示すに神の道徳を以て其の道徳を以て其の道徳を

# 啄木短歌の心算

改訂 東海の小島の磯の海老と  
海老と海老と海老と海老と海老と海老と

海老と海老と海老と海老と海老と海老と  
海老と海老と海老と海老と海老と海老と

海老と海老と海老と海老と海老と海老と  
海老と海老と海老と海老と海老と海老と





啄木

監修 東海の小島の磯

歌の心理学

大沢博

博

洋文社

大沢 博（おおさわ・ひろし）

一九二八年 群馬県に生まれる

一九五二年 東京文理科大学心理学科卒業

現在 岩手大学教育学部教授

専攻分野 教育心理学、カウンセリング、病跡学  
著・訳書

『石川啄木の秘密』光文社（カッパブックス）

『意味への意志』フランクフル著（訳）ブレーン出版

『援助関係』コームズ他著（共訳）ブレーン出版

『石川啄木の短歌創造過程についての心理学的研  
究』桜楓社

『食原性症候群』ブレーン出版

## 啄木短歌の心理学

昭和六十三年四月十五日改訂第一刷

定 価——二〇〇〇円

発行者——梅田鉄夫

発行所——株式会社 洋々社

〒162 東京都新宿区南町一五一—101

TEL ☎ 三六六一〇五五 FAX ☎ 三六一七三三

印刷所——朋文印刷

製本所——弘済印刷

落丁・乱丁はおとりかえます。

0092-001091-8710

## 序

大沢氏はカウンセリングの方法に長じられておられるが、この方法を通じて、文学者の「病蹟学」にまでいきつくことに成功した。つまり、文学者の病気がいかにして傑作を生むかの秘密にまで到達したのである。その成功のすじみちを書いたのが本書である。

どうか心ある人は一読していただきたい。そうして文学者の書く一語一文がいかに深い心のさけびであるかを知っていただきたい。

波多野 完治

(元・お茶の水女子大学学長)

まえがき

東海とうかいの小島こじまの磯いその白砂しらすなに

われ泣なきぬれて

蟹かにとたはむる

詩人石川啄木が処女歌集「一握の砂」の巻頭を飾ったこの歌は、実に多くの人々に知られ、愛好され、うたわれている。啄木とは直接関係のない観光地の、みやげものの壁掛などにも書かれているほどである。

ま え が き  
当然、この歌についても諸家が解釈をこころみてきたのであるが、一般の人々の多くは、北海道の海岸の回想歌という説に影響されて、北海道の海岸の砂浜での思い出を詠んだ歌と思ってしまうようである。函館の大森浜で作られた歌、とさえ思っている人もいるくらいである。この歌

は、大森浜で作られたのではなく、東京本郷の下宿、赤心館で作られたものである。明治四十一年六月二十四日朝、前夜から徹夜で連作してきた諸歌にひきつづいて作られたもので、百十三首の連作歌の中の一首である。啄木はそれらの歌を、「暇ナ時」と題した歌稿ノートに書きつけていた。

私は五十二年の五月に、光文社の好意によって、著書『石川啄木の秘密』（カッパブックス）を世に問うことができたが、私の啄木研究の発端は、故人となった石田六郎の啄木研究に触発されて、このノート「暇ナ時」の歌稿、とくにこの「東海とうかいの」の歌がどんなイメージや思いにもとづいて作られたのだろうか、ということに好奇心を抱いたことであった。

『石川啄木の秘密』においても、この歌に一章をついやし、従来の諸家の解釈とはもちろんのこと、石田の精神分析的解釈とも異なる、まったく新しい解釈を提出した。すなわち、この歌の「われ」を除く名詞の背後に、七人の女性のイメージが秘められていて、そのうちの一人の少女のイメージは怨霊でもあり、「泣きぬれて」という表現の背後には、怨霊恐怖が秘められていたというものである。これは、解釈というよりも解説ということばの方がふさわしいであろう。

本書は、そのような解説のプロセスをもう少し詳しくわしく述べた、というだけのものではない。ここで私は、本書執筆の意図を読者のみなさんに理解していただくために、あらかじめ本書の各

章の内容を簡単に紹介しておきたい。

第一章では、私の心理学研究の歩みの中で、後に啄木研究に活用された方法がどんなふうに学ばれてきたか、を述べた。私の啄木研究の基盤となっている研究方法を、読者に理解していただくことがからである。

しかし私の啄木研究は、私が学んできた研究方法を啄木の短歌創造過程などに適用したというだけのものではない。啄木の作品や日記などを丹念に調べることにより、啄木から研究方法を学んだし、今もなお学びつつあるという面もあるのである。

第二章は、石田六郎の精神分析学的見地からの啄木研究を紹介したものである。私が石田の最初の著書『初恋人の魂追った啄木の生涯―啄木の精神分析―』に出会ってから、私の頭の中に、やがて東海歌についての石田の解釈のしかたへの疑問が生じたところまでの、経過を述べた。

私の啄木研究は石田の先駆的研究、とくに啄木の初恋人の発見という研究成果なしには生まれなかつたものであるが、歌稿ノート「暇ナ時」の解説については、全く同じ見地に立つものではない。私は石田の研究から妥当と思われる部分を学びとり、私なりの解説をすすめてきたつもりである。

ま え が き

第三章は、この東海歌というひとつの全体の各部分、すなわちそれぞれの語、とくに名詞と動

詞をいわば一語一語に分けて、意味を探究したものである。同じ語が使われた他の作品と照らし合わせながら、この詩人が一語一語の背後にどんな思いをこめていたか、どんなイメージを秘めていたか、推理をすすめたものである。

第四章は、第三章の分析結果を総合して吟味した経過を述べたものである。とくに、七人の女性のイメージが存在していたことを裏づける資料や、怨霊恐怖の起源と経過についての探究のプロセスを述べた。

第五章は、歌稿ノート「暇ナ時」の第一首から東海歌にいたるまでの、七十六首全部の解説をこころみたものである。石田の第二著『啄木短歌の精神分析―肉筆歌稿「暇ナ時」の分析―』は、副題の示すとおり、この歌稿の分析を発表したものであるが、東海歌にいたるまでの歌でとり上げたのは、五十一首であった。しかも、東海歌直前の四首にはふれていなかったし、現前の女性との関係で怨霊恐怖が生じていたことには、まだ気づいていなかった。

私は、啄木に怨霊恐怖が存在したことなどについての私の探究結果にもとづいて、東海歌までの全首解説をこころみたのである。東海歌が生まれていく必然性についての、私の解明の努力を理解していただけたらと思う次第である。

なお付として、啄木がなぜ「砂」という語を使った歌を、歌集『一握の砂』の冒頭においた

のか、とりわけ東海歌を第一首にしたのはなぜか、という問題について述べた。

また、歌集『一握の砂』に怨霊鎮魂という動機が秘められていたことを示すために、第二章の題にもなっている「煙」という啄木の愛好語と、それを使っている歌についても論究した。

以上が本書の各章の内容のごく簡単な紹介であるが、本書の執筆をもって私の啄木研究が終わったわけではない。まだ「暇ナ時」の全首の解説をしていないし、他の作歌ノートの歌や、歌集の歌の解説など、探究心をそそる問題が限りなくひろがっているのである。啄木短歌の深さを、いまさらながら痛感しているところである。

昭和五十年の春まだ浅き頃、啄木短歌解説の手がかりをつかんだばかりの私の話に耳を傾け、「先生書きませんか」と言ってくくださったのが、啄木研究家の遊座昭吾氏であった。遊座氏は、「啄木は人と人を結びつける」ということばをよく吐かれるが、まさにその通りであると思う。

私の啄木研究も、本書の中であげた方々をはじめ、実に多くの方々とお会いし、お世話になりながらすすんできたものである。とくに、東京在住の啄木研究家清水卯之助氏は、本郷の赤心館跡をはじめ、都内の啄木遺跡のほとんどすべてを案内してくださったし、しばしばはげまじや助言を与えてくださった。

遊座氏ならびに清水氏をはじめ、お世話くださった方々に深く感謝申し上げる次第である。

おかげさまで、私の前著は多くの人々に読まれているが、本書も多くの人々に読んでいただけるよう、読みやすさを考えて、難読漢字にはふりがなをつけたことを、ここでおことわりしておきたい。なお、引用した啄木の作品は、主として『啄木全集』（筑摩書房版）を底本とした。

本書は、洋々社の梅田鉄夫氏が快く出版を引き受けてくださったことにより、誕生するものである。梅田氏に心から御礼を申し上げる。

大 沢 博

## 目次

序（波多野完治）

まえがき

## 第一章 私の啄木研究の背景

- (1)心理テストからカウンセリングへ……………一五  
啄木のふるさと岩手に赴任 人格の心理学的  
研究を志す カウンセリングの学習
- (2)カウンセリングの実践……………二四  
カウンセリングの実践をめざして 針金をの  
む少年 登校拒否の高校生 自己概念  
と行動の変化

(3) 学習の意味の探究…………… 矣

「分ける」ということ 「分ける」と「合わせる」 仮説ということ

(4) 子どもの詩と教科書…………… 喫

「五足の上ぐつ」という子どもの詩 原作と教科書のちがい なぜ書きかえたのであろうか？

## 第二章 石田六郎の啄木研究

(1) 啄木の初恋人の発見…………… 矣

石田六郎著『初恋人の魂追った啄木の生涯』  
弘済童女沼田サダの墓の発見

(2) 歌稿ノート「暇ナ時」の研究…………… 矣

岩手大学における講演「啄木と内観」 第二  
の著書『啄木短歌の精神分析』 東海の歌と

第三章 東海の歌の解説

——分析すること——

- (1) どのように解説していくか……………七  
これまでどのように解釈されてきたか 「暇  
ナ時」執筆までの啄木のあゆみ 爆発的大量  
作歌の中の「東海」の歌 どのように解説し  
ていくか
- (2) 「蟹と戯る」とはどういうことか……………八  
心中を迫った女がいたのでは？ 貞子と出会  
った新詩社演劇会 貞子についての金田一京  
助の思い出 貞子を詠んだ歌 詩「蟹に」  
の「蟹」は？
- (3) 「白砂」とはなにか……………一〇八

「砂」の歌 函館と「砂山」 函館以前の  
作品に「砂」はないか? 「白」の歌

(4) 「東海の小島の磯」とはなにか……………一三五

「磯」とはなにか? 「東海」と妻節子

「小島」にも女性を秘めたのでは?

(5) 「泣きぬれて」とはどういうことか……………一三六

「泣く」と「涙」の歌 詩「一塊の土」の「泣

きぬるる」

(6) 「我」とはどんな我か……………一四五

「我」の歌 「我」の二重構造 我の分裂

と葛藤 東海の歌の「我」はどんな我か?

#### 第四章 東海の歌の解読

——総合すること——

(1) 七人の女性のイメージ……………一六三

啄木の心に残った多くの女性 「名」の歌と  
数をかぞえている歌 「七人」と「七」の歌  
友人との恋人くらべと女性リスト 東海之歌  
に秘められた女性の順序

(2) 怨霊恐怖について……………一七

貞子の接近と恐怖 詩「小さき墓」 啄木  
をおそったのはたたり恐怖 貞子の怨言と不  
気味な体験 怨霊恐怖の起原は何か 啄木  
はほんとうに墓を掘ったか たたり恐怖はい  
つ始まったか 「爾伎多麻」にみられる啄木  
の死の恐怖 小説「葬列」の中の「一事件」  
眉間の黒子による予言 「易者」と「黒子」の歌

第五章 東海之歌創造へのプロセス

——連作過程の分析——

(1) 初頁八首と「こ志をれ」五首……………三二

「暇ナ時」初頁八首の歌 「こ志をれ」と題  
された五首

(2) 「石」の歌……………三三〇

大量作歌の第一首「石一つ」 詩や小説など  
にも繰り返し返された「石」

(3) 死の世界のイメージ……………三三〇

黒衣の人や白い水鳥 眠れる恋よりも北方の  
君

(4) 胸の底からの悲哀感……………三四〇

頬につたふ涙 わが胸の底の底にて誰ぞ一人

(5) 不毛の現在から幼き日への回想……………三五〇

鳥飛ばず、人は生れず、稲は実らず 笑はさ  
る女と眠れる我 幼き日の悲哀

(6) 東海の歌の誕生……………三六〇

君が名を七度よべば 「南風」から「東海」へ  
「蟹と戯る」から「青草の床」へ 東海の歌

付 啄木の抑うつと低血糖症

- (1) 赤心館下宿時代の抑うつ……………二六四  
「泣きぬれて」 悲哀感、頭痛、不眠、疲れ、  
無感動、倦怠感、自殺志向——抑うつ症状——  
抑うつ神経症か 低血糖症とは 赤心館時  
代の啄木の食生活
- (2) 生涯にわたる症状……………二九五
- (3) 「暇ナ時」にみられる症状……………三〇四
- (4) 『一握の砂』にみられる症状……………三〇五